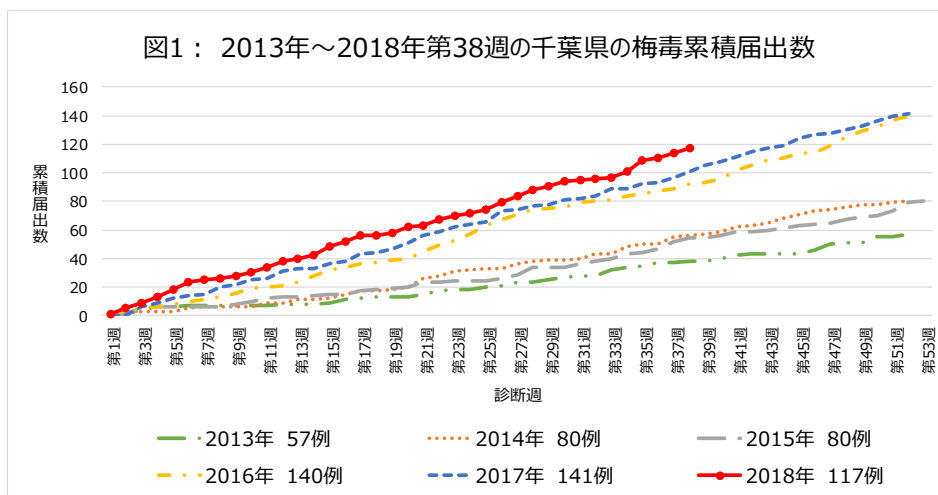


## 【今週の注目疾患】

### 【梅毒】

2018年第38週に県内医療機関から3例の梅毒の届出を認め、2018年の累計は117例となった。県内における梅毒の届出は、2017年に近10年で最も多くの届出があったが、2018年はそれを上回るペースの届出を認めている(図1)。



2018年に届け出られた117例の内訳は以下である。

- 性別

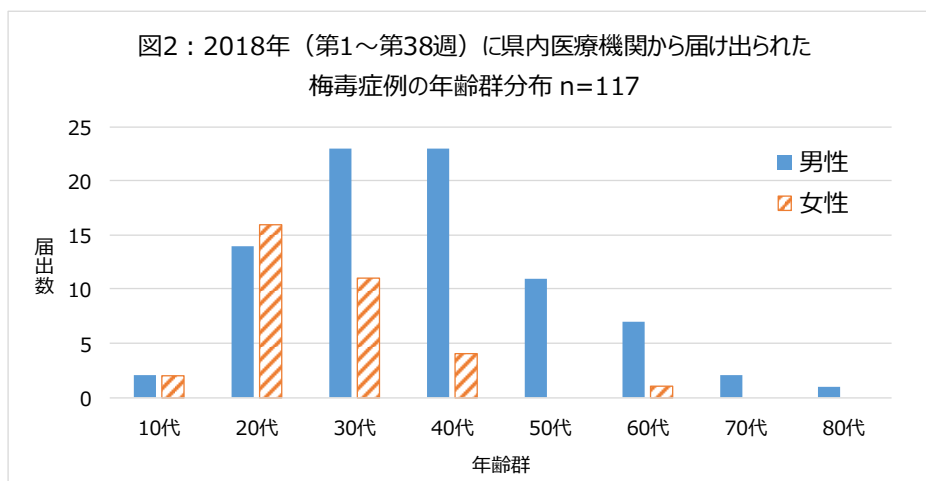
男性：83例

女性：34例

- 年齢群

男性：10代2例、20代14例、30代23例、40代23例、50代11例、60代7例、70代2例、80代1例

女性：10代2例、20代16例、30代11例、40代4例、60代1例



- 病型

男性：早期顕症梅毒（Ⅰ期）26例、早期顕症梅毒（Ⅱ期）21例、晩期顕症梅毒3例、無症候33例

女性：早期顕症梅毒（Ⅰ期）4例、早期顕症梅毒（Ⅱ期）14例、無症候16例

● 推定感性経路(重複あり)

男性:性的接触(性交)51例、性的接触(経口)11例、その他9例、不明6例

性的接触(同性間)8例、性的接触(異性間)51例、性的接触(不明)7例

女性:性的接触(性交)27例、性的接触(経口)3例、その他3例、不明1例

性的接触(同性間)1例、性的接触(異性間)29例、性的接触(不明)2例

男性は20代から60代の届出が多く、特に30代および40代が多い。女性は20代および30代に多く、特に20代では男性よりも女性の届出の方が多い(図2)。また、推定感染経路については異性間性的接触の届出が多い。

梅毒は感染後3～6週間程度の潜伏期を経て、経時的に様々な臨床症状が逐次出現するが、その間症状が軽快する時期があるため、治療開始の遅れにつながることもある。一般的に、感染後約3週間後に病原体が進入した局所に、初期硬結、硬性下疳(潰瘍)が形成され、無痛性の所属リンパ節腫脹を伴うことがある。これらの症状は数週間で軽快するが、症状が一旦消失したのち4～10週間の潜伏期を経て、今度は手掌・足底を含む全身に多彩な皮疹、粘膜疹、扁平コンジローマ、梅毒性脱毛等が出現する。発熱、倦怠感等の全身症状に加え、泌尿器系、中枢神経系、筋骨格系の多彩な症状を呈することがある。これらの症状も、数週間～数ヶ月で無治療でも症状は軽快するが、無治療の場合、約1/3で晩期梅毒症状が出現し、長期(数年～数十年)経過後に非特異的肉芽腫様病変(ゴム腫)、進行性の大動脈拡張を主体とする心血管梅毒、進行麻痺、脊髄癆等に代表される神経梅毒に進展する。また、梅毒は罹患している母体から胎盤を通じて胎児に伝播されることがあり、先天梅毒発生のリスクがある。

梅毒の感染連鎖を防ぐため、感染が疑われる症状がみられた場合には、早期に医師の診断・治療を受ける必要がある。コンドームの不適切な使用によるリスクの上昇や、オーラルセックスやアナルセックスでも感染すること、梅毒は終生免疫を得られず再感染すること、これら梅毒の特徴について注意が必要である。

参考・引用

国立感染症研究所 梅毒とは

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/465-syphilis-info.html>